

堂本上長塙遺跡

たつの市

堂本上長塙遺跡

都市計画道路本龍野富永線街路事業に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

兵庫県文化財調査報告
第412冊

二〇一二年三月

兵庫県教育委員会

2012(平成24)年3月

兵庫県教育委員会

堂本上長塙遺跡

都市計画道路本龍野富永線街路事業に伴う

埋蔵文化財発掘調査報告書



2012(平成24)年3月

兵庫県教育委員会



西区全景(東から)



出土土器類

本文目次

第1章 はじめに

第1節 遺跡の環境

1. 地理的環境	1
2. 歴史的環境	1

第2節 調査の経緯・経過

1. 発掘調査	3
2. 出土品整理	4

第2章 調査の結果

第1節 調査区の状況

1. 概要	5
2. 土層	5
3. 西区	6
4. 中区	7
5. 東区	7

第2節 出土遺物

1. 西区出土遺物	8
2. 中区出土遺物	10
3. 東区出土遺物	12

第3章 総括 13

図版目次

図版1 調査区の位置

図版5 西区出土遺物（2）

図版2 西区平面

図版6 中区土層断面・出土遺物

図版3 西区土層断面

図版7 東区平面・出土遺物

図版4 西区出土遺物（1）

図版8 東区土層断面

写真図版目次

写真図版1 上：調査前全景（東から）

写真図版6 上：東区土器出土状況（南から）

中：西区アーフアルト除去（西から）

中：西区機械掘削状況（南西から）

下：調査区全景（東から）

下：中区人力掘削状況（北西から）

写真図版2 上：西区全景（西から）

写真図版7 上：東区人力掘削状況（北西から）

中：西区全景（東から）

中：西区遺構検出状況（西から）

下：西区南側壁土層断面（北から）

下：中区土層団作成状況（南西から）

写真図版3 上：西区遺物出土状況（西から）

写真図版8 上：中区・東区出土土器

中：西区柱穴状構造（東から）

下：西区出土土器（1）

下：西区遺構状況（東から）

写真図版9 上：西区出土土器（2）

写真図版4 上：中区全景（北から）

下：西区出土土器（3）

中：中区東側壁土層断面（西から）

写真図版10 上：西区出土瓦（凸面）

下：中区土器出土状況（東から）

下：西区出土瓦（凹面）

写真図版5 上：東区全景（北から）

写真図版11 西区出土石製品・鉄器

中：東区土層の変化部分（北から）

写真図版12 上：中区出土土器

下：東区施肥土の集積（北東から）

下：東区出土土器

例　言・凡　例

1. 本書は都市計画道路本龍野富永線街区事業に伴う堂本土上長辯遺跡の発掘調査報告書である。遺跡は兵庫県たつの市龍野町堂本土上長辯に所在する。
2. 発掘調査および整理作業は、兵庫県西播磨県民局龍野土木事務所の依頼を兵庫県教育委員会が受けて兵庫県立考古博物館で実施した。
発掘調査の担当者は以下のとおりである。
確認調査（調査番号：2009281・2009301） 小川弦太
本発掘調査（調査番号：2010161） 岸本一宏
3. 発掘調査に際しては表口建設工業株式会社をはじめ、掘削、平面・土層断面実測および写真撮影にあたっては有限会社松浦興業の協力を得た。遺構の写真撮影は調査員が実施し、出土品整理作業については兵庫県立考古博物館の非常勤嘱託員が行なった。また、遺物の写真撮影は地域文化財研究所に委託して実施した。
4. 本書の執筆は、発掘調査担当者である岸本が行い、編集は嘱託員の補助のもと、岸本が行った。
5. 本報告で使用した図面・写真・遺物は、兵庫県立考古博物館および魚住分館で保管している。
6. 発掘調査にあたっては、たつの市教育委員会の岸本道昭氏の御協力を得た。
7. 土層断面図の色調名は『新版標準土色帳』（農林水産省農林水産技術会議事務局・財團法人日本色彩研究所色票監修）によるものであり、土層名のうち、堆積物の粒度区分については、『新版地学ハンドブック』（大久保雅弘・藤田至則編著、筑地書館株式会社発行）により、調査担当者が経験的に触感により判断したものである。
8. 遺物番号は本文・挿図・写真とも同一とし、遺物の種類ごとに通し番号としている。
また、遺物番号のうち、石製品には番号の前に「S」、金属器には「M」をそれぞれ冠し、種類ごとに通し番号としている。
9. 土器類実測図のうち、須恵器は断面黒塗りにしている。
10. 本書に掲載した挿図のうち、第1図は国土地理院発行の1/25,000地形図を使用した。

第1章 はじめに

第1節 遺跡の環境

1. 地理的環境

兵庫県たつの市は兵庫県の南西部に所在し、旧国名では播磨国に属するが、その位置から西播磨に位置づけされる。たつの市は、2005年（平成17年）に龍野市と揖保郡の新宮町、揖保川町、御津町が合併して誕生し、人口約81,000人、面積約211km²の規模を有する。兵庫県内では人口で第15位、面積では第10位の地方都市である。北は宍粟市、西は相生市と赤穂郡上郡町および佐用郡佐用町、東は姫路市と揖保郡太子町と境を接し、南は瀬戸内海の播磨灘に面している。市内は北から旧新宮町、龍野市、揖保川町、御津町の順に南北に並び、海に面しているのは旧御津町域に限られる。たつの市域内の東寄りには南北方向の揖保川が南流し、播磨灘に注ぐ河口付近は南東方向にその流れを変えている。いっぽう、旧新宮町域はその多くが山間地となっており、揖保川流域の平野部以外には北西から南東方向に流れる栗柄川流域の谷底平野が認められる。

堂本上長塚遺跡が存在する部分は、緩やかに蛇行する揖保川の東側で、山間地から平野へと変換した部分で、河川堆植物による沖積平野や氾濫原にあたり、旧流路と想定される部分もいくつか認められる。

2. 歴史的環境

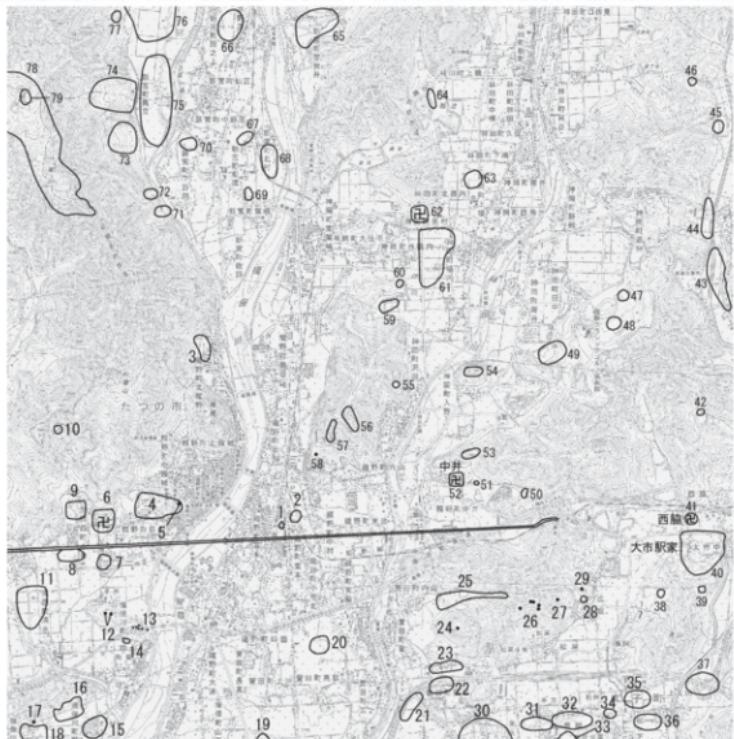
たつの市中心部分である龍野町域のうち、揖保川東岸の平地部分には周知の遺跡が少なく、今回報告する堂本上長塚遺跡（以下本遺跡と呼称）と同時代にあたる弥生時代・奈良時代の遺跡では、本遺跡のすぐ北東側の中村遺跡（第1図2）、や約1.2km南側の小宅遺跡（20）が存在するに限られる。中村遺跡は弥生時代～古墳時代の遺物散布地で、弥生時代の様相としては本遺跡と似通っており、古墳時代では中村古墳の伝承地とされている。また、本遺跡の約140m南側には律令時代の官道である古代山陽道推定地が東西に横断しており、その南方に位置する小宅遺跡は奈良時代～中世の遺物散布地である。

周辺に存在する弥生時代遺跡のうち、本遺跡から約2km北側の揖保川西岸山麓部に位置する北龍野遺跡（3）が中期後半であり本遺跡との関連において注意される。

周辺の弥生時代遺跡のうち前期に遡る構造が検出されているのは半田山遺跡（13）の壇棺などや平方遺跡（32）の土壙などがあげられるのみで、大半の集落は中期中葉以降のものであるが、それらは林田川東岸の平地部分に数多く認められる。また、中期後葉段階からの集落のうち、丘陵上や台地上といった高地に存在する遺跡が第1図中のほぼ4割を占めており、遺跡の立地意味を政治的あるいは自然的に捉えるうえで示唆を与えてくれる地域である。なお、弥生時代後期末以降の弥生墳墓はほぼ丘陵上や台地上にその立地が限られるようになり、古墳時代以降に引き継がれる。

奈良時代の遺跡では、本遺跡の対岸にあたる揖保川西岸部分の小神芦原遺跡（7）などで建物跡や墨書き器などが多く検出されており、その一帯が「郡府」ともいるべき郡衙域を形成していた可能性がある。また、寺院跡は古代山陽道や美作道に沿って多くの寺院が存在し、「駅寺」ともいるべき駅家の駅長となった氏族の私寺や「郡寺」などと思われる。なお、城山城（78）は古代山城として注目されている。

本遺跡が存在する揖保川と林田川に挟まれた地域では、遺跡数が少なく、この地が氾濫原であって、湿地など生活にはやや不向きな土地であったことを示しているのであろう。



第1図 周辺の弥生時代・奈良時代遺跡

第1表 遺跡名表（番号は第1図に対応）

番号	遺跡名	番号	遺跡名	番号	遺跡名	番号	遺跡名	番号	遺跡名
1	堂本上長塚	17	養久山32号墓	33	南柳	49	寄井	65	曾我井
2	中村	18	養久土谷	34	松ヶ下北	50	中井花池	66	井野原砂原
3	北龍野	19	桜ヶ坪	35	王子	51	中井瓦窯跡	67	北村梅原
4	白山	20	小宅	36	松ヶ下	52	中井庵寺	68	北村前田
5	白鬱山墳墓群	21	福田片岡	37	亀田	53	中井	69	佐野西ノ雍
6	小神庵寺	22	福田天神	38	向池	54	殿岡山	70	下野田大溝
7	小神芦原	23	福田八軒屋	39	畠井山	55	沢田	71	興聖寺裏山
8	小神辻の堂	24	内山篠山1号墓	40	太市駅跡	56	片山東山	72	下野田大平
9	小神上栗寺	25	内山	41	西脇庵寺	57	片山東山南	73	馬立平山
10	大道寺跡	26	篠山4~9号墓	42	棚池	58	片山東山山号墓	74	馬立上塚
11	清水	27	湯ノ谷埴丘墓	43	山ノ鼻	59	沢田宮谷	75	馬立
12	半田山9~10号墓	28	篠山11号墓	44	百坪	60	鶴神社裏山	76	市野保
13	半田山11~5号墓	29	広坂壺棺墓	45	上伊勢1号窯	61	横内	77	市野保水布弥谷
14	町屋楠	30	城山	46	上伊勢2号窯	62	奥村庵寺	78	城山城跡
15	野田高畑	31	平方宮ノ本	47	山田	63	上横内	79	亀ノ池
16	野田中谷	32	平方	48	東田中	64	鶴池		

第2節 調査の経緯・経過

1. 発掘調査

龍野土木事務所による都市計画道路本龍野富永線街路事業にともなって、兵庫県教育委員会では平成19（2007）年度に分布調査（遺跡調査番号：2007025）を実施し、その結果を受けて平成21（2009）年度には2回にわたって確認調査（遺跡調査番号：2009281、2009301）を実施した。確認調査の結果、中世の遺構面および柱穴や溝といった遺構状のものに加えて遺物包含層から土器が出土した部分が存在し、一定の範囲に認められたことから、その部分について本発掘調査を実施した。

（1）分布調査

平成19年度4月に実施した分布調査では、事業予定地である調査対象地が市街地となっていることから遺物の採集等は不可能であったため、龍野市（当時）教育委員会による既往調査成果の聞き取りおよび、北東側に接して存在する中村遺跡（遺跡番号120105）との地形環境の類似等を観察する方法で調査を行った。その結果、弥生時代～古墳時代の遺跡である中村遺跡において、龍野市（当時）教育委員会の調査によって弥生土器が出土した地点が事業地ときわめて近接していること、事業予定地の地形環境が中村遺跡と類似することが明らかとなった。

（2）確認調査

平成21年度に実施した確認調査は、平成22年の2月と3月の2度にわたって実施した。いずれも平成19年度の分布調査結果によって、龍野土木事務所からの依頼によるものである。

2月におこなった確認調査は、主として調査対象地の東半分である、「本竜野」駅前から西側の交差点を超えたあたりまでの延長約150mの区間である。2m×2mのトレンチを4か所設定して掘削した結果、最も西側に設定したトレンチ4において中世の遺構面および柱穴状遺構を確認し、同時に須恵器・土師器といった土器片も出土した。このことから、交差点付近から西側には遺構が残っている可能性が高いと判断した。

3月にはさらに西側の範囲について、2m×2mのトレンチを設定し掘削して遺跡の有無の確認をおこなった。その結果、2月のトレンチ4よりも西側では、若干の土器が出土したもの、遺構は認められなかった。また、トレンチ4と交差点との間にトレンチ3を設定して調査した結果、中世遺構面と溝を検出した。これらのことから、2月実施のトレンチ4から3月実施のトレンチ3の間にかけて遺構が連続して存在していると判断した。

（3）本発掘調査

本発掘調査は、龍野土木事務所からの調査依頼（平成22年5月17日付け西播（龍土）第105号）により、確認調査の結果判断した範囲について平成22年6月15日から実施した。

調査は、兵庫県が「直接執行」と呼称する方法で実施した。直接執行は、事業者が発掘調査の人員・機械・道具等を確保し、調査を担当する職員のみを教育委員会から出張させる方法であり、短期間の調査において採用している方法である。堂本上長瀬遺跡の場合も6月29日までの実働10日間の調査期間であった。

調査対象地は、現道路の北側拡幅部分であり、その部分に面して住宅や駐車場および脇道があるため、それぞれの入り口を確保しながら調査区を3分割した。

調査の方法は、表面にあるアスファルトを除去したのち、機械により盛土層を掘削し、その下層の遺物包含層については遺構面が存在すると思われる高さまで人力により掘削した。遺構面と判断した土層の表面は、遺構を検出するために丁寧に削って精査をおこなうとともに、遺構と思われるものについては掘削をおこなった。遺構や遺物が検出された場合には、写真撮影や平面実測をおこない、調査区全体の土層堆積状況の観察および写真撮影・実測を実施した。

以上の記録を作成したのち、調査区全体の埋戻しをおこない、調査を終了した。

2. 出土品整理

出土品整理作業については、調査終了後の平成23年度に龍野土木事務所の依頼により、兵庫県立考古博物館において実施した。

出土品整理作業は遺跡の発掘調査の結果、記録保存とした場合の記録である発掘調査報告書作成のための作業である。その内容は、土器・石器などの水洗、出土位置などを示す番号の土器への記入（ネーミング）、出土した土器片の接合、接合した土器片の足りない部分や不安定な部分のモルタルでの補強、出土遺物の写真撮影、土器の破片がもとの形に近い状態にまで接合できた場合のモルタルでの完形品への復元、出土遺物の実測、現地で作成した実測図の補正、遺物図や土層図・平面図などのトレース、報告書に掲載する図や写真を選別して配置してゆくレイアウト、およびそれら全体の編集作業などである。

堂本上長瀬遺跡の出土品整理作業を実施するにあたっては、水洗・ネーミング、接合・補強と復元、遺物実測・トレース・レイアウト、金属器保存処理など各工程の作業には嘱託員があたり、その指示や確認および工程管理を担当職員がおこなった。また、遺物写真については地域文化財研究所に委託して撮影をおこなった。

各担当職員および嘱託員・日々雇用職員は以下のとおりである。

整理作業進行管理

兵庫県立考古博物館 整理保存課 山本 誠 深江英憲

整理作業指示・確認

兵庫県立考古博物館 調査第1課 岸本一宏

整理作業担当嘱託員・日々雇用職員

水洗・ネーミング

兵庫県立考古博物館 整理保存課 西口由紀 小林陽子

接合・補強・復元

兵庫県立考古博物館 整理保存課 嶋岡美見 吉村あけみ 又江立子

遺物実測・トレース・レイアウトほか

兵庫県立考古博物館 整理保存課 柏原美音 佐々木聰子 古谷章子

金属器保存処理

兵庫県立考古博物館 整理保存課 岡田美穂 桂 昭子 浜脇多規子

以上の工程を経たのち、印刷会社に発注して印刷・製本をおこなった。

第2章 調査の結果

第1節 調査区の状況

1. 概要

調査区は、現道北側の道路拡幅予定部分であり、現状では更地となっており、アスファルトが敷かれていた。また、調査区のさらに北側に存在する住宅や駐車場等への自動車の出入口が存在していたため、その間隔をあけて調査区を3分割し、調査区間の2箇所を通路として確保した。いっぽう、西端についても集合住宅のごみ集積場が存在していたことから、ごみ収集車の通路を確保するために調査範囲をせばめて調査区を設定した。

3箇所の調査区は西から順に、西区、中央区、東区と呼称し、確認調査で遺構状のものが検出された西区から調査を開始し、中央区、東区の順に進めていった。

調査は、地表面のアスファルトを除去したのち、重機により碎石・盛土・耕土・旧耕土を除去し、西区については黄灰色の床土上面から人力により遺構検出をおこない、その後は遺物を包含している灰褐色土を人力掘削して遺物の回収につとめた。なお、床土上に遺構が存在しないことが判明したため、中区・東区では遺物包含層である灰褐色土上面まで重機により掘削し、遺物包含層については適宜遺構検出をおこないながら人力掘削をおこなった。遺物包含層は深さ約30cm程度で土器をほとんど包含しなくなつたため、土器の出土量が激減した時点で各調査区の掘削を終了した。

調査面積は合計90.0m²で、西区は49.8m²、中区は20.1m²、東区も20.1m²であった。

調査の結果、確認調査で柱穴・溝と判断された遺構状のものは、水田床土中のブロック土および床土表面の凹凸であることが判明したことから、遺構とは判断しなかった。しかし、床土下層からはかなりの量の遺物が出土し、西区では遺物の集積部分や礫の集中部、溜り状遺構を検出することができた。また、東区では遺物包含層である灰褐色土に暗灰褐色を呈する部分が広範囲に検出されたため、竪穴住居跡の可能性を考慮しながら精査をおこなったが、灰褐色土に斑状に混入した色調の違いであるとの結論に至った。

2. 層序

前述のように、調査区の表層には厚さ約5cmのアスファルトが敷かれており、その下層は整地層である碎石層が厚さ10~15cmにわたって敷かれていた。その下層も厚さ30~80cm前後の盛土層となっていたが、その盛土は宅地等の造成のために行われたものと思われ、水田あるいは畑の耕作土（第2層）上に直接盛られていた。耕作土上面の高さは西区と中区で海拔約27.0m、東区では約26.9mとなっており、水田または畑構築時の旧地形は西が高く東が低くなっている。ただしその傾斜は緩く、中区と東区の間で約10cmの段差が存在していたにすぎない。この水田または畑上の盛土が行われた時期は不明であるが、明治40年の地図では水田または畑となっており、昭和45年頃の地図ではすでに宅地となっていることから、その間に盛土がなされたようである。

耕作土層の下層には灰色（5Y5/1灰色）の旧耕作土（第3層）が認められ、水田または畑の面が一度かさ上げされたことがわかる。旧耕作土上面の高さは、東区と中区で約26.75m、西区では約26.90mであり、この面でも西側が高く東側が低くなっているものの、その差は約15cmとわずかである。旧耕作土

の厚さはいずれの地区でも10cm前後とはば均一で、その下層には黄灰色（2.5Y6/8明黄褐色）を呈する床土（第4層）が2～8cmとやや厚く敷かれていた。第4層はやや粘質で、須恵器・土師器といった土器が含まれておらず、特にこの層の下部からその下層上面あたりにかけて多くの遺物が出土した。

以上述べた床土以上の層はすべて客土であり、その下層はすべて自然堆積層で、基本的には第7層の灰褐色土層（10YR5/2灰黄褐色）であり、土器・石器を含む遺物包含層となっており、特に上部に含まれる遺物の量は多く、弥生時代と飛鳥・奈良時代に限定されるようであった。また、この第7層は各調査区においてその状況が少しずつ異なっていた。

西区では、西部に限定されて、第4層の下部に灰黄白色（2.5Y5/3黄褐色）の土層（第5層）が第7層の上に乗るかたちで堆積していた。この部分は溝状窪み埋土の上部にもあたり、この層にも土器を包含していたうえ、後述の土器集中部がこの層中に含まれる可能性が高い。また、この部分が水田構築時の削平を受けずこの層の上部に床土が貼られたようである。第5層の下層は溝状窪みの埋土となっている第6層で、明灰褐色（2.5Y5/2暗灰黄色）のシルト質極細粒砂であり、土器片を多く含んでいた。

西区での第7層は下部にいくにつれ若干粒子が粗くなるものの、深さ約30cmまでは色調等大きな変化は認められなかった。ただし、西端の溝状窪みの下部では、水の影響によって多量のマンガン粒が集積して暗灰褐色（10YR4/2灰黄褐色）を呈していたため、第8層とした。

中区および東区でも第7層より上の層は基本的には西区と同一であるが、中区では盛土層の下部に耕土・旧耕土および床土を削平して瓦礫を多く含んだ層でかさ上げがおこなわれていた部分が南西部で認められた。また、東区では第4層が2層に分離でき、上層は黄灰色で粘質の床土状の土層、下層は旧耕土状の土層となっていた。

中区での第7層は約30cm下まではば均一であったが、東区においては第7層上面から約20cm下部で色調が暗色となる部分（第7”層）が厚さ約10cmにわたって認められ、その下層はまた明るい色調となって、粒子がやや粗い土層（第7”層）となっていた。この土層は一部深掘りによって約20cmの厚さまで確認したが、その下層の状況については不明である。

なお、東区内南西部において直径約50cmの範囲に焼土塊や焼土粒の集積が認められたが、この焼土集積は第7”層に乗るかたちで存在していた。

3. 西 区

平面台形を呈する最も広い調査区である。地表面から約70cmの深さの床土上面まで重機により掘削し、床土上面で遺構の有無を調べるために精査をおこなったが、その面では遺構と判断できるものが検出されなかつたことから、厚さ約10cmで黄灰色を呈する床土層（第4層）を人力により掘削除去し、その下層である灰褐色土（第7層）の上面において再度遺構検出をおこなった。しかし、その面でも遺構は検出されなかつたことから、第7層上面から約10cmの深さまで人力掘削し、そこで遺構検出作業を実施した。その際、西区の西端部分で溜り状の遺構とその底に柱穴状遺構を検出し、すぐ西側には奈良時代の瓦と土師器甕などが破片となって集積した状態で検出された。また、その北側では人頭大の角礫～亜円礫が2m×1mの範囲に集積した状態で検出され、その周囲から土師器・須恵器といった土器も多く出土した。奈良時代の土器等集積部分に含まれていたのは、平瓦片2点と玉縁をもたない丸瓦片1点のほか、土師器では2種の甕片と鍋の可能性がある破片や坏片および製塙土器片があり、須恵器の大型品の体部と思われるやや大きめの破片も含まれていた。この土器集積部分は他よりもやや高い位置であった

ことから、第5層に含まれていたものと判断している。

また、溜り状落ち込みの下面で柱穴状の穴を検出し、そのうちの2個について掘削した結果、埋土と思われた土層がマンガン集積下部と同じ土層であったことから、柱穴状にみえた部分はマンガン集積がない部分であることが判明した。

これらはすべて人為的な造構と確定できなかったものの、多量の土器が出土したことは注目される。

土器類や石器等が含まれて黄色味をおびた灰褐色土（第7層）は、砂質でシルト分が多く含まれており、洪水等により川から供給されたものである可能性が高く、その際に土砂と一緒に土器も押し流されてきたものと推定され、同じく流れが速いうちに押し流されて集積した暁の部分に土器も集積した可能性が考えられる。この層に含まれる土器が、層の上部や下部に関係なく弥生時代・奈良時代のものであり、それらは厚い同一層のなかでとくに面を形成していないこともそのことを示していると思われる。

第7層については、土器や鍍の集積状況の写真撮影や実測ののち、人力によりさらに掘削したが、約20cm掘り下げた深さで土器の出土量がきわめて少なくなったため、掘削を終了した。

4. 中 区

中区も土層堆積状況は西区とほぼ同じであり、西区で床土上面には造構が存在しなかったことから、地表面から約90cmの深さの灰褐色土上面まで重機により掘削した。灰褐色土上面では、造構の有無を確認するため検出作業をおこなったが、明確な造構は検出されなかった。ただし、奈良時代の須恵器壊が破片となって2箇所で集中的に出土した。そこで、さらに人力により灰褐色土を掘削した結果、28ℓ入りコンテナ0.5箱分の土器が出土した。これらの土器のなかには上記の須恵器のほか、弥生時代中期後半の器台破片も含まれており、西区で出土したものと同一個体である可能性が高い。また、第7層上面から出土した壺のような形態で半環状の把手が付いた異形須恵器（23）は特殊である。灰褐色土は深さ30cm程度掘り下げた深さで土器の出土量が激減したことから、掘削を終了した。

5. 東 区

東区も西区や中区と同様の土層堆積状態を示していたことから、黄灰色の床土下面まで重機により掘削したのち、第7層上面で造構検出作業をおこない、その後第7層を約10cm掘り下げた結果、調査区の西寄り中央部でやや明るい色を呈する部分（第7'層）が認められたため、さらに精査をおこなった。平面的には直径3m程度の円形に土層が異なっているようにみえ、南側には焼土の集積も認められたことから、竪穴住居跡の可能性を考えて、サブトレレンチを掘削し、断面観察をおこなった。また、そのほぼ中央に東西方向の畔を設けて、その南側を1m四方程度掘削すると同時に北東側にもサブトレレンチを設けて西壁と同様に土層断面観察をおこなった。その観察では、第7'層は上部にのみ顯著に認められたが、下部では徐々に色が薄くなり、ふたたび第7層と同化してしまっていることが判明し、竪穴住居の床面と判断できるような土層も認められなかったことから、造構と判断することはできなかった。

いっぽう、その南側に存在した焼土の集積は直径約50cmのはば円形に認められた。この集積は焼土塊や焼土粒が集まつたものであり、高さが約10cmあったことから、その部分を断ち割って断面の観察をおこなったが、竈のようなものではなく、人為的かどうかの判断もできなかった。

東区においても第7層中に土器を包含し、約30cmの深さで遺物をほとんど含まない部分まで人力掘削した結果、28ℓ入りコンテナ0.5箱分の土器が出土した。それらは奈良時代の土器片が中心であった。

第6節 出土遺物

1. 西区出土遺物

(1) 土器類 (図版4・5、巻頭図版、写真図版8~10)

西区から出土した遺物には弥生土器・須恵器・土師器といった土器のほか、布目と思われる瓦の破片や石製品があり、それらは西区南西部で集中して認められたほか、遺物包含層である灰褐色砂質シルト層（第7層）や第7層上層の黄灰色土（第4層）から遺物が出土しており、両者出土の破片が接合した例（9）も認められる。また、南西部で集中していた遺物には瓦、須恵器、土師器があり、図の12~18に示した。

遺物包含層出土遺物のうち、第7層の灰褐色シルト層から出土した土器は1・2・5・7・9で、第4層の黄灰色土～第7層から出土したのは3・4・6・8～18に示した土器および古瓦である。

石製品は北西部の集石部分に含まれていたS 2・S 3が第4・7層出土で、遺物包含層から出土した可能性が高いS 1がある。また、第4層から出土した鉄製品もM 1に示している。

1は灰褐色砂質シルトから出土した弥生土器壺口縁部である。口径は24.4cmを測る。頸部から大きく外反して水平近くにのび、端部は上下に拡張しているが、上部は突堤を貼り付けたようになっている。口縁端面には4条の凹線文を施し、円形浮文を貼り付けている。凹線は幅1.5mm程度の細筋のもので、円形浮文は数箇所に複数ずつ貼り付けられていたと思われるが、小片のためその数や方向は不明である。弥生中期のIV期に相当する。

2は弥生中期土器の器台脚部である。調査区西部の灰褐色砂質シルトから出土している。中区でも同一器種の20が出土しており、同一個体である可能性がある。脚端部は上下に拡張し、径26.2cmを測る。脚部外面下端には、丁寧に描かれた細線鋸歯文を連続してめぐらせているようである。文様の単位は幅約5.0cm、高さ約4.5cmのヘラ描き鋸歯文で、その内側を18～20条の垂直に近いヘラ描き直線で充満させるものである。脚部径が約29cmであることから、鋸歯文は全体で6単位であると推定される。鋸歯文の上側には凹線文を7条以上めぐらせているが、幅4mm程度のやや細いものとなっている。西播磨の弥生土器編年（長友・田中 2007）ではIV-2期に編年されるものと思われる。残存高は8.2cmで、外面の鋸歯文を描く前の調整は縱方向のヘラ磨き、その他の部分はヨコナデであるが、凹線文の凸部にも一部横方向のヘラ磨きを加えている。脚部の一部に黒斑が認められ、内面下部の表面にも及んでおり、褐灰色を呈している。

3は須恵器環であるが底部を欠失する。黄灰色土～灰褐色砂質シルト上部から出土したものである。口径は11.4cmを測り、体部は直立に近いが、底部への移行部はかなり丸くなっている。外面には自然釉がかかり灰オーリーブ色を呈している。また、底部移行部には別個体の細片が軸着している。奈良時代前半期の可能性が高いと判断している。

4も須恵器環Bの底部破片である。6と同じ層から出土しているが、6よりもやや小ぶりで高台径は8.0cmである。高台は底部のやや内側に貼り付けられ、底部と体部との境にはにぶい稜を有している。残存高は2.1cmで、底部外面は回転ヘラ切りのヨコナデ、他の部分はヨコナデであるが、底部内面には仕上げナデを施している。奈良時代前半期の所産と推定される。

5は灰褐色砂質シルト出土の須恵器環Bの底部で、口縁部の上半を欠失する。輪高台は幅2.5mm、高さ5.5mmと幅の狭いものであり、底部の最も外側に貼り付けられている。口縁部が残存していないこと

から径高指数は不明であるが、奈良時代後半期のものと推定される。高台の径は10.0cm、残存高は2.6cmを測る。底部外面は回転ヘラ切りのちヨコナデ、他の部分はヨコナデであるが、底部内面には仕上げナデを施している。

6は須恵器壺Bの底部である。黄灰色土～灰褐色砂質シルト上部から出土している。高台径は9.5cmで、底部外端よりもやや内側に貼り付けられている。高台高は低く奈良時代前半期と推定される。残存高は2.4cmで、底部外面は回転ヘラ切りのちヨコナデ、他の部分はヨコナデであるが、底部内面には仕上げナデを施している。底部内面は平滑になっており、使用によるものと思われる。

7は灰褐色砂質シルト出土の須恵器壺口縁部である。口径は22.7cmで、口縁端部外面は玉縁状に肥厚するが、内面は凹面をなさない。表面は焼しがかかったように暗灰色を呈する。奈良時代後半期の可能性が高い。

8は西区北西隅部分で集中的に出土した破片と黄灰色土～灰褐色砂質シルト層上部から出土した破片が接合したものである。頸部が短い須恵器壺Aの口縁部～肩部にかけての破片で、口径は20.9cmである。口縁端部にはほぼ水平な面を有し、内側に若干拡張している。すべてヨコナデ調整で、蓋を被せた状態での焼成痕は認められない。残存高は5.7cmである。

9は、直口でいわゆる薬壺形に近い形態を呈する須恵器壺Aの口縁部から肩部にかけての破片である。口径は16.7cmを測る。黄灰色土～灰褐色砂質シルト層上部から出土したものと灰褐色シルト層から出土した破片が接合している。口縁部は高さ約3.5cmで、端部はやや内傾する面を有する。肩部外面には自然釉が付着していることから、口縁部全体を覆うかたちの蓋を被せた状態で焼成されたと判断できる。焼成は良好で堅緻となっている。体部外面には平行タキ痕が認められる。

10も黄灰色土～灰褐色砂質シルト上部から出土している。貼付輪高台を有する須恵器壺類の底部と思われるが、詳細な器種は不明である。高台径は10.2cmを測り、体部下端外面は幅約3cmのヘラ削り状になっている。内面はヨコナデ調整である。焼成は良好である。残存高は6.0cmである。下端から約2cm上の外面には「渥台」の痕跡が認められる。

11は詳細な器種は不明であるが、須恵器壺類の底部と思われる。黄灰色土～灰褐色砂質シルト上部から出土している。底径は10.4cmで、底面はほぼ平坦である。体部下端外面には横方向のヘラ削りを施しており、内面はナデ調整となっている。底部外面は平滑になっており、使用によるものと思われる。

12は土師器甕である。西区北西隅部分で集中的に出土した破片と黄灰色土～灰褐色砂質シルト層上部から出土したものが接合している。外面は暗灰色、内面は灰黄色を呈している。ほぼ垂直の体部から内湾したのち屈曲して外上方にのびる口縁部を有する。口縁部は内湾気味になっている。口縁端部は外側から押されることによって面をつくり出しており、下方に粘土がはみ出している部分が多く認められる。口径は30.2cm、残存部分での体部最大径は30.7cm、残存高は14.0cmとなっている。体部外面の調整は縱方向のハケを密に施しており、内面はヨコナデ仕上げであるが、ヘラ削りをおこなっている可能性が高い。口縁部の内面にはハケ目が遺存しているが、口縁部外面はヨコナデ調整のみのようである。奈良時代の所産と思われる。

13は土師器甕の口縁部である。黄灰色土～灰褐色砂質シルト上部から出土している。体部から大きく外反しながら外上方にのびる口縁部で、端部はやや厚みを減じ、若干の垂直に近い面を有する。口径は17.0cmと推定される。口縁部内外面はヨコナデ、体部内面上端部には横方向のヘラ削りが認められる。奈良時代の所産と推定される。

14の出土層位・位置は、黄灰色土～灰褐色砂質シルト層上部で西区西端部において集中的に土器・瓦が出土した部分である。内外面とも橙色～灰褐色を呈し、赤褐色のイメージである。土師器の壺と思われるが、体部が若干外傾していることから壠（なべ）である可能性もある。口縁部は体部から屈曲して外上方に内湾気味に短くのびる。口縁部中央は外側に少し肥厚させている。口縁部は面をもち、内側に引きのばしたようになっている。口縁部内面と体部外面にはハケ目が遺存しており、口縁部外面と体部内面はヨコナデ調整であるが、体部内面にはヨコナデの前に板ナデ状のヘラ削りを施している。全体に砂粒を多く含む個体で、口径は35.1cm、残存高は9.6cmを測る。奈良時代に属するものと思われる。

15は土師器壺Aの破片である。器表が磨滅していることから調整等は不明である。黄灰色土～灰褐色砂質シルト層上部から出土している。口径12.8cm、器高は2.9cmで、径高指数は23であることから、奈良時代末の平城宮VIの時期である可能性が高い。

16は製塩土器の破片である。口縁部がわずかに残存しており、口径11.6cmと推定される。器表が磨滅していることから調整痕は不明であり、内面の布目の有無も確認できないが、他の破片では内面に布目を確認できるものがある。砂粒を非常に多く含み器壁が1.4cmと厚い。砲弾形を呈し、残存高は6.2cmである。奈良時代の所産であろう。西区北西隅部分で集中的に出土した土器片のうちの1点である。

17・18は西区西端部の土器集中部から出土した瓦である。層位的には黄灰色土～灰褐色砂質シルト層上部にあたる。17は丸瓦であるが、玉縁を有しない無段の「行基瓦」である。18と同じく黄橙色～橙色を呈し、焼成不良で軟弱であり、表面は磨滅している。凹面には布の合わせ目が認められる。18は平瓦の狭端側の破片で、凸面は斜格子タキ、凹面にはかろうじて布目が確認できる。格子のタキ目は長い方で約3.0cmとやや粗いものとなっている。橙色を呈し、焼成不良である。17・18ともに奈良時代前半である可能性が高く、付近に寺院等の瓦葺建物が存在していた可能性が高い。

（2）石製品・金属器 （図版5、写真図版11）

①石製品

石製品では、サヌカイト製スクレイパー1点（S 1）および石皿の破片と思われる2点（S 2・S 3）を図示した。

S 1はサヌカイト製のスクレイパーで、3側縁に不完全な刃部を認める。長さ36.7mm、幅41.8mm、厚さ5.0mm、重さ13.6g。S 2は閃綠岩（質）製の石皿で、表裏2面が使用されている。長さ120.5mm、幅89.0mm、厚さ46.0mm、重さ636.3g。S 3も花崗岩（質）製の石皿で、中央部の断面は長方形を呈し、表裏2面に使用を認める。長さ240.6mm、幅157.5mm、厚さ119.4mm、重さ8,300gである。

②金属製品

鉄製品が2点出土しているが、1点のみ図示した。M 1は勧の可能性がある破片で、三角形状を呈している。残存長9.0cm、残存幅は6.7cmで約0.8cmの厚みがある。反りが若干認められ、端部が残存している可能性のある左辺側はカーブを描いている。出土時には錆で覆われていた。

2. 中区出土遺物

（1）土器類 （図版6、巻頭図版、写真図版8・12）

中区でも西区同様、遺物包含層である灰褐色シルト層を中心として弥生土器や須恵器・土師器といった遺物が出土した。それらのうち、弥生土器・須恵器・土師器の8点を図版6の19～26に示した。

19は灰褐色シルト層中より出土した弥生中期の広口壺口縁部片である。口径は33.9cmと推定され、大きく外反してのみ口縁端部を上下に大きく拡張し、幅約2.7cmの外傾する端部を作り出している。端部には5条の凹線文を施し、棒状浮文を3～6mm程度の間隔で6本連続して貼り付けている。棒状浮文が口縁部を全周しているかどうかは不明である。凹線文は単位幅約2.0mmとやや細筋であるが、深さは約1.0cmである。口縁端部内側の内面には櫛描波状文が1帯描かれ、10条ないし11条1単位が確認できる。この波状文は口縁内面を全周している可能性があろう。口縁部内面には黒斑が認められる。西区出土の2と同様に、西播磨の弥生土器編年（長友・田中 2007）ではIV-2期に編年されるものと思われる。

20は灰褐色シルト層中より出土した弥生中期の器台脚部片である。西区で出土した2と同一形態で、同一文様を有していることから、同一個体である可能性が高い。脚部径も27.3cmと近い。端部は内外に拡張し、端面は凹面をなしている。端部直上の外面上には鏡による鋸歯文が描かれており、その内部は垂直に近い直線を多数描くことで充填している。鋸歯文の高さは約4.5cm、幅は約5.0cmと推定される点も2と同じ大きさとなっている。鋸歯文の上側には凹線文が3条以上認められる。外面鋸歯文帯部分は縱方向のヘラ磨きを施文前におこなっている。内面はヨコナデ調整である。2と同一時期の所産である。

21は須恵器環Gまたは環Aで、灰褐色シルト層上面から出土したものである。口径11.8cm、器高3.3cmで、回転ヘラ切りのままの底部から、屈曲ぎみにやや内湾しながら外上方にのびる口縁部となる。口縁端部は丸い。飛鳥Vに近い時期である可能性を考えている。

22は中区南西部で一括して出土したものであり、層位的には灰褐色砂質シルトである。須恵器環Bで、体部へ口縁部にかけての約1/2を欠失する。高台は底部のやや内側に貼り付けられ、外側に少しふんばる。高台径は9.4cmである。底部外面は回転ヘラ切り後ヘラ削りで整えているようである。また、外周付近は高台貼り付けの際のヨコナデが施されている。底部内面はヨコナデで、中央部のみ仕上げナデが認められる。体部下端の底部への移行部分は丸みをもつが、にぶい稜を有している。口縁部は外上方にほぼ直立する。焼成は良好で堅緻となっているが、外面の一部および断面にはにぶい黄橙色を呈し、還元焼成が不十分となっている。口径は12.6cm、器高3.6cmで、径高指数は28で、奈良時代前期の平城宮IIの時期と推定される。底部外面の高台内には爪の圧痕が認められる。

23は異形の須恵器である。灰褐色シルト層上面から出土している。口縁部を欠失しているが、環Aのような器形の内面底部に把手状の半環を貼り付けている。内外両面に自然釉が付着していることから焼成時の上下を判断することができないが、环身としての正位置で判断すると、容器の口縁部の内側にはまり込む形の蓋となろう。また、天地逆とすれば、口縁部を覆う形態になるが、把手状の環の機能が推定しづらい。焼成は良好で堅緻、底部外面は回転ヘラ切り後ヨコナデを施し、部分的に静止ヘラ削りを加えている。底径は9.5cm程度と推定される。飛鳥～奈良時代の時期を与えることができるであろう。

24は内傾する口縁部を有する須恵器鉢Aの口縁部である。灰褐色シルト層上面から出土したものである。口径は18.0cm、口縁端部は内傾する面を有している。全体にヨコナデ仕上げとなっている。体部から口縁部の湾曲がゆるやかで長いことから、奈良時代前半である可能性がある。

25は灰褐色シルト上面から出土した須恵器鉢あるいは壺の底部付近である。平底で、底径は12.0cmと思われる。体部の調整はヨコナデを基本としているが、体部下端には幅約4.0cmでヘラ削りを加えており、このヘラ削りは底部外面の外周にも及んでいる。残存高は8.8cmを測る。体部内面は平滑になっていることから、鉢の可能性が高いと判断しているが、壺とすれば、上半部欠損後に再利用されていた可能性が高い。焼成はややあくまで灰白色を呈する。

26は中区南西部で一括して出土した土器片と包含層である灰褐色シルト上面から出土した破片が接合した。土師器甕の口縁部で、ほぼ垂直と思われる体部から曲折して外上方にのびる口縁部である。中央部の器壁が厚いことから、外面では内湾し、内面では外反しているようにみえる。口縁端部は外傾する面となり、端面をおさえることにより、上端部はわずかに拡張したようになっていると同時に、凹面を形成している。口縁部内面と体部外面はハケ調整で、口縁部にはヨコナデを加えている。口径は21.0cmと推定され、奈良時代の所産と考えられる。

3. 東区出土遺物

(1) 土器類 (図版7、巻頭図版、写真図版8・12)

東区でも、遺物包含層である灰褐色シルト層を中心として須恵器や土師器といった土器が出土した。そのうちの6点を図版7の27~32に示した。また、なかには上層に含まれていた(29)も存在する。

27は東区北西隅で一括して出土した破片と中区の灰褐色シルト層出土の破片が接合したものである。須恵器環B蓋で、焼成が悪く軟質で調整痕が磨滅しているものの、つまみを貼り付けた際のヨコナデ痕がかろうじて確認できる。口径19.5cm、残存高1.8cmで、口縁端部は面を有するものの、下方への垂下はわずかであり、上部もかすかに凹面をなす程度であることから、奈良時代前半の平城宮I～IIの時期である可能性を考えている。大部分は灰白色を呈しているが、外面の周囲幅約1.0cmと、内面の外周の幅約3.0cmの部分が環状に灰色となっており、重ね焼きの痕跡が顯著に遺存している。

28は灰褐色シルト層上部から出土した、須恵器環Bの底部破片である。径12.6cmを測る高台は、底部外周よりもやや内側に貼り付けられ、底部と体部の境は丸みがあるものの、にぶい稜を有している。底部外面は回転ヘラ切り後ヨコナデ、内面はヨコナデ調整で、中央部に仕上げナデを施している。残存高は1.8cmである。

29は機械掘削時に黄灰色土層と灰褐色土層上面から出土した。須恵器環Bの底部破片で、高台径は9.9cmで、底部外周よりもやや内側で、ふんばるように貼り付けられている。体部と底部の境にはにぶい稜線を有している。奈良時代前半期の所産と思われる。

30は土師器の壺もしくは壺、あるいは鉢と思われる口縁部片である。灰褐色シルト層上部から出土したものである。口径は16.0cmと推定され、端部は丸い。高さは約3.7cm遺存している。内外面はかなり磨滅しているが、表面に塗布された橙色の顔料が部分的に残存している。外面は横方向のヘラ磨き、内面もヘラ磨きのようであるが、方向は不明である。奈良時代頃と推定している。

31は土師器甕の口縁部片で、灰褐色シルト層および焼土の集積部分を断ち割った際に出土した破片が接合したものである。口径は12.1cmで、口縁端部は丸みをもった面となっている。口縁端部は内側に小さく玉縁状に肥厚させている。体部は垂直に近く、口縁部は体部から緩やかに外反して外上方に短くのびる。内外面とも器表の磨滅により調整痕が残っていないが、体部内面が斜め方向のヘラ削りであることが確認できる。残存高は4.4cmである。飛鳥～奈良時代の所産である可能性が高い。

32は土師器甕の口縁部片で、灰褐色シルト層上部から出土している。体部から大きく外反して横外方に外反気味にのびる口縁部で、端部には面を有する。口径は24.4cmと推定される。口縁部外面はヨコナデ、内面はヨコハケで、わずかに残存する体部の外面はタテハケ、内面はヘラ削り後ヨコナデのようである。奈良時代頃の所産と推定される。

第3章 総括

1. 土層・遺構

堂本上長堀遺跡の本発掘調査の結果、旧地形では西側が東側に較べてやや低くなっていることが判明した。しかしその傾斜は緩いものであることから、広範囲におよぶものではないと思われる。

今回の調査では明確に人為による遺構と判断できるものは検出できなかったが、多量の遺物が出土したことは特筆できよう。遺物が出土したのは水田または畑の基盤である床土層（第4層）およびその直下の灰褐色土（第7層）で、遺物はこの第7層の上部を中心に多く出土し、第4層にも含まれていた。おそらく、水田構築のために第7層上面を整形した際に遺物が第4層に混入したものと思われる。

西区西部において第7層上面から下がる深さ22cmの溝状窪みを検出し、その下面で柱穴状の穴を検出したが、いずれも人為的な遺構と判断するにはいたらなかった。東区では、竪穴住居跡の可能性がある土層の変化部分を検出したが、水平土層堆積の凹凸部分にあたることが判明し、住居跡床面も検出されなかった。また、その南側では焼土の集積部分が認められたが、焼土面が存在したわけではなかった。

第7層は砂質でシルト分が多く含まれており、洪水等により川から供給されたものである可能性が高く、その際に土砂と一緒に土器も押し流されてきたものと推定され、同じく流れが速いうちに押し流されて集積した疊の部分に土器も集積した可能性が考えられた。それは、この層に含まれる土器が、層の上部や下部に関係なく弥生時代・奈良時代のものであり、厚い同一層のなかで面を形成していないことからも推察できた。仮に遺構が存在するとすれば、奈良時代以降の可能性があろう。

2. 奈良時代の遺物

今回の堂本上長堀遺跡の本発掘調査の結果、予想以上に多量の土器が出土した。それらは、弥生時代中期後半と飛鳥・奈良時代を中心とした時期に限られており、数量的には奈良時代の土器が圧倒的に多い。とくに、奈良時代前半を中心とした土器群のなかには、須恵器壺や土師器甕といった比較的大きな破片として遺存していたものが多く認められ、瓦も少量であるが、大きな破片で出土している。このことと、遺物包含層である灰褐色土が洪水による堆積土であるという判断をあわせると、発掘調査地点の上流側の近い部分には奈良時代前半の瓦葺きの建物が存在していた可能性が高い。建物は瓦葺であることから、寺院や役所の建物であった可能性もある。現在、周辺には奈良時代遺跡の存在が確定されていないが、今後奈良時代前半の瓦を使用していた建物跡が発見される可能性があるものと思われる。

3. 弥生時代の遺物

また、さらに遡った弥生時代中期後半の土器は遺存状況も比較的良好で、ほどこされた文様も明瞭であることから、近隣の周辺には弥生時代中期後半の集落跡といった遺跡の存在も考えられるものと思われる。とくに、約2km北側に存在する北龍野遺跡はその有力な候補となろう。

なお、今回掘削した遺物包含層である灰褐色土は、調査区内のみならず周辺に広がっている可能性が高く、そこに遺物が含まれていることも十分考えられる。今後とも注意が必要であろう。

参考文献

長友朋子・田中元浩 2007『西播磨地域の土器編年』『弥生土器集成と編年－播磨編－』大手前大学史学研究所

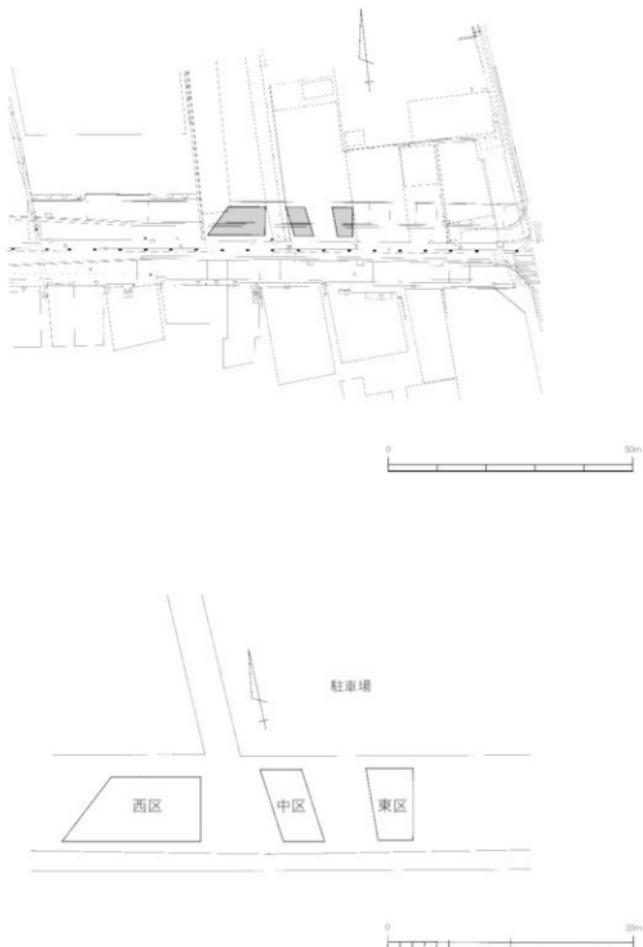
報告書抄録

ふりがな	どうもとかみながはい いせき							
書名	堂本上長塚遺跡							
副書名	都市計画道路本龍野富永線街路事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
シリーズ名	兵庫県文化財調査報告							
シリーズ番号	第412冊							
編著者名	岸本一宏 山本誠							
編集機関	兵庫県立考古博物館							
所在地	〒675-0142 兵庫県加古郡播磨町大中1丁目1番1号				TEL.079-437-5589			
発行機関	兵庫県教育委員会							
所在地	〒650-8567 神戸市中央区下山手通5丁目10番1号				TEL.078-341-7711			
発行年月日	2012年(平成24年)3月29日							
所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
堂本上長塚 遺跡	兵庫県たつの市 龍野町堂本 上長塚	28229	120660	34度	134度	20100218	確認16m ²	都市計画道路
				51分	33分	20100318	確認12m ²	本龍野富永線
				34秒	7秒	20100615～ 20100629	本発掘調査 90m ²	街路事業

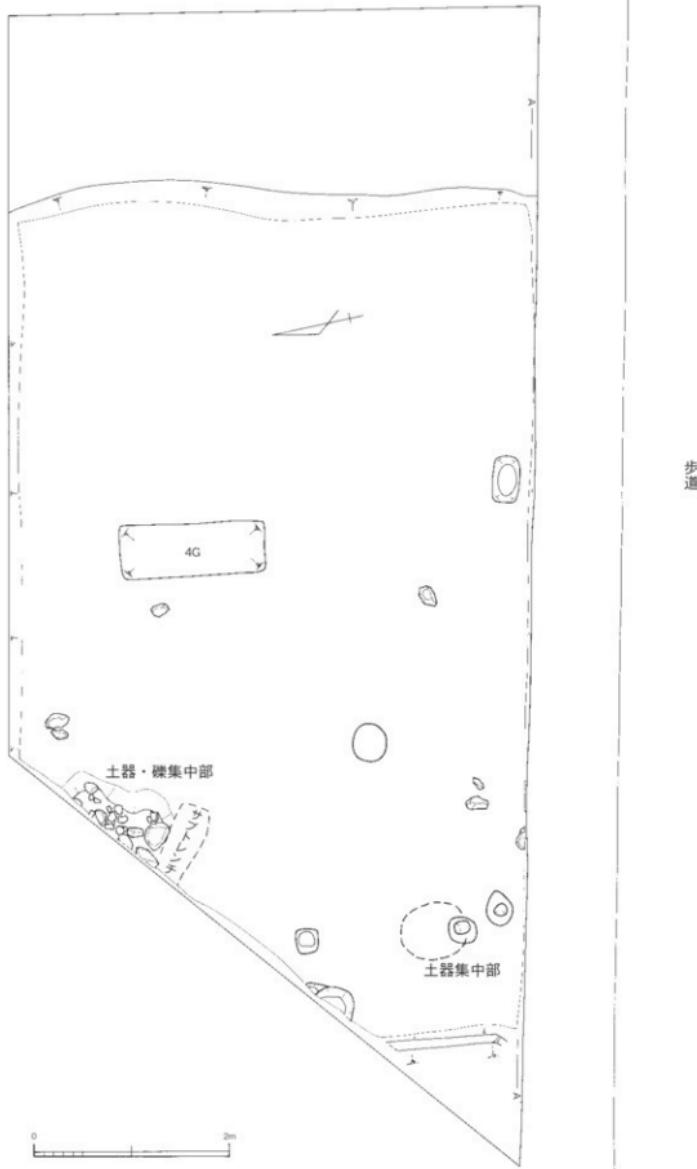
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
堂本上長塚 遺跡		弥生時代中期後葉		弥生土器・石器・石製品	
		奈良時代		須恵器・土師器・瓦	異形須恵器

要約
3地区に分けて本発掘調査をおこなった結果、西区で溝状の溝みとその下面で柱穴状の穴を検出したが、人為的な遺構とは判断できず、東区においても焼土の集積や土色の変化部分が認められたものの、明確に遺構と判断できるものではなかった。しかし、床土直下の灰褐色土層において多量の土器をはじめ石器・石製品が出土した。それらは奈良時代のものが圧倒的に多く、弥生時代中期後半のものも認められた。灰褐色土層は洪水等による堆積層の可能性が高く、弥生時代中期後半の土器は遺存状態が良いことから、近隣の遺跡から押し流されてきたものと推定される。また、奈良時代の遺物についても同様の推定ができるが、瓦が含まれていたことから、近隣に存在していたと推定される奈良時代前半の遺跡は、寺院や役所の建物といった瓦葺の建物を含むものであった可能性が高いと思われる。なお、奈良時代と思われる、内面に環状把手の付いた环形の須恵器は異形土器として特筆できよう。

図 版



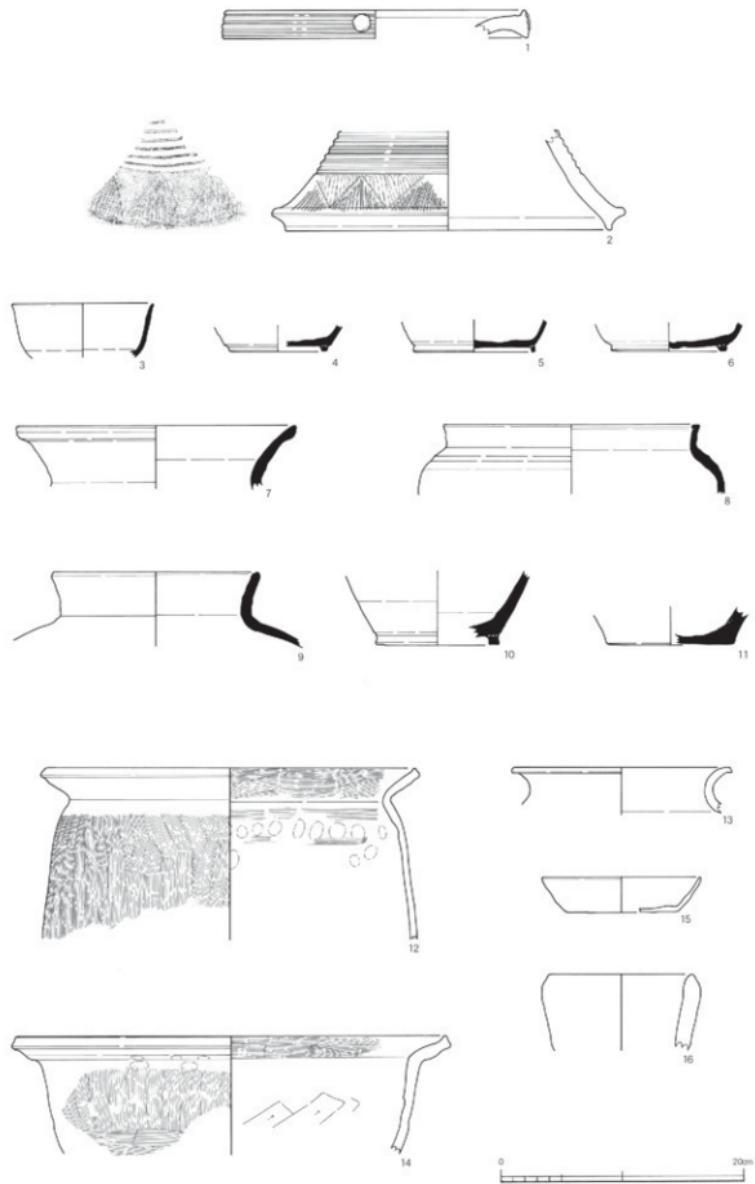
調査区の位置



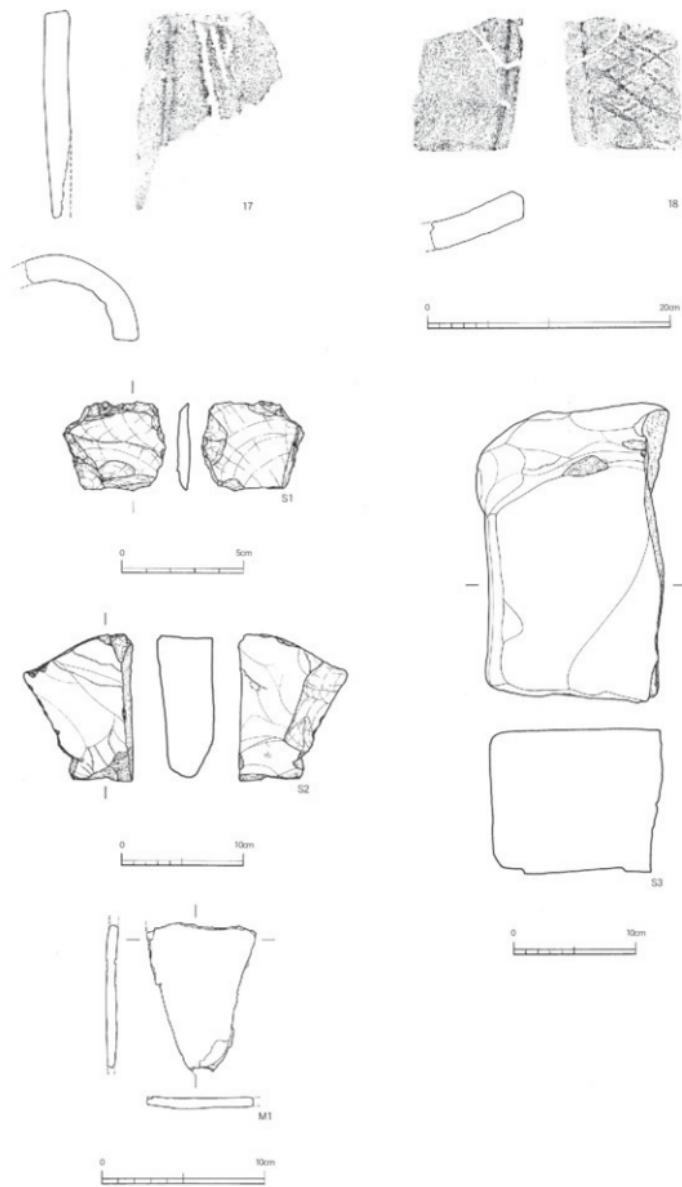
西区平面



西区土層斷面



西区出土遗物（1）

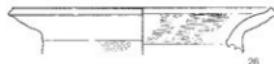
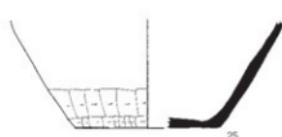
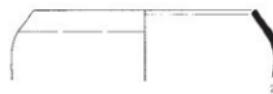
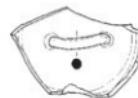
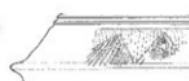
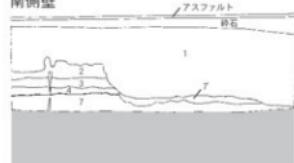


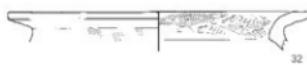
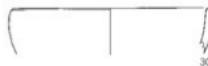
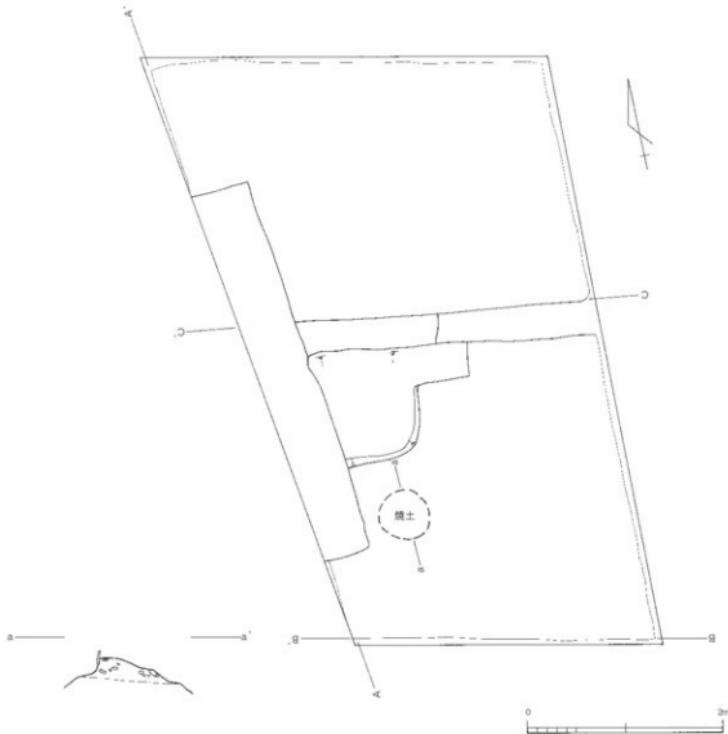
西区出土遺物（2）

東側壁



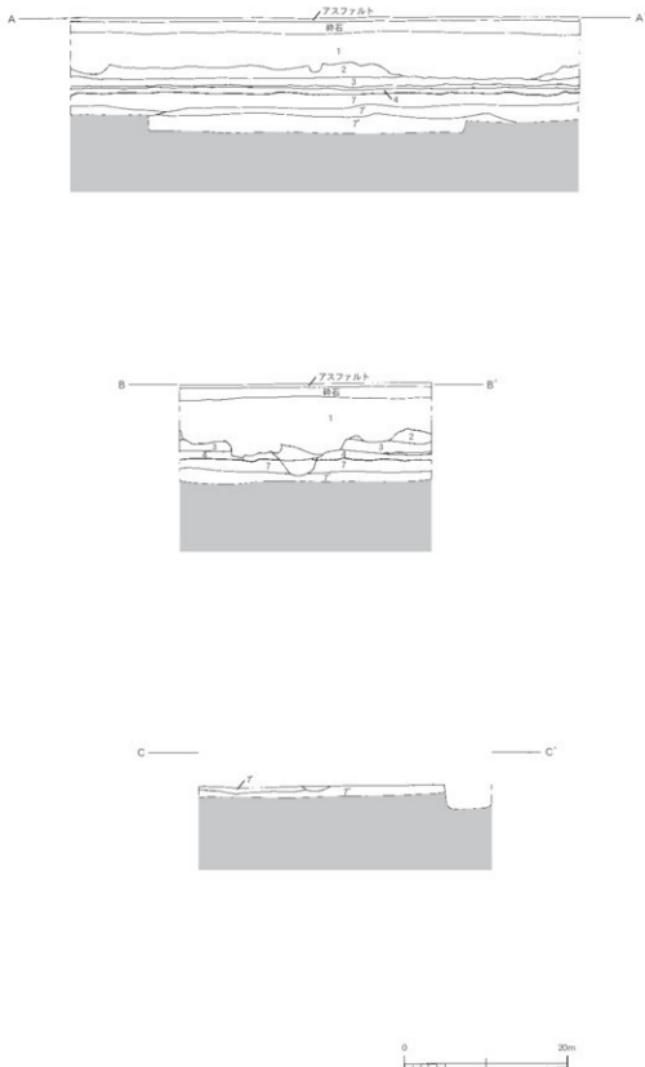
南側壁





0 20cm

東区平面・出土遺物



東区土層断面



調査前全景（東から）



中区アスファルト除去（西から）

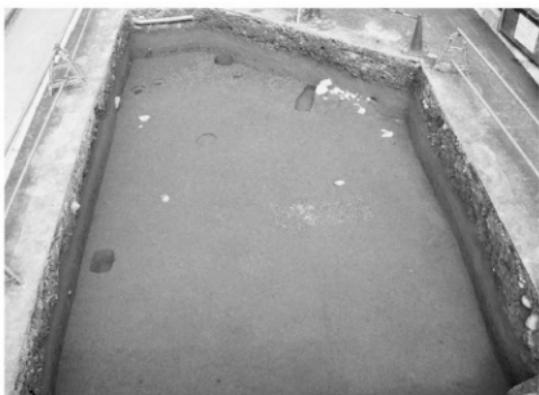


調査区全景（東から）

写真図版 2



西区全景（西から）



西区全景（東から）



西区南側壁土層断面（北から）



西区遺物出土状況（西から）



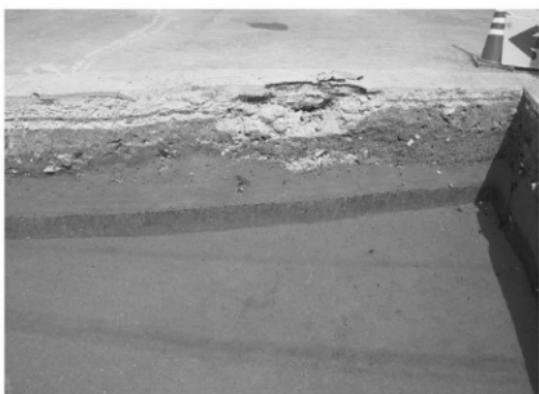
西区柱穴状遺構（東から）



西区礫集積状況（東から）



中区全景（北から）



中区東側壁土層断面（西から）



中区土器出土状況（東から）



東区全景（北から）



東区土層の変化部分（北から）



東区焼土の集積（北東から）



東区土器出土状況（南から）



西区機械掘削状況（南西から）



中区人力掘削状況（北西から）



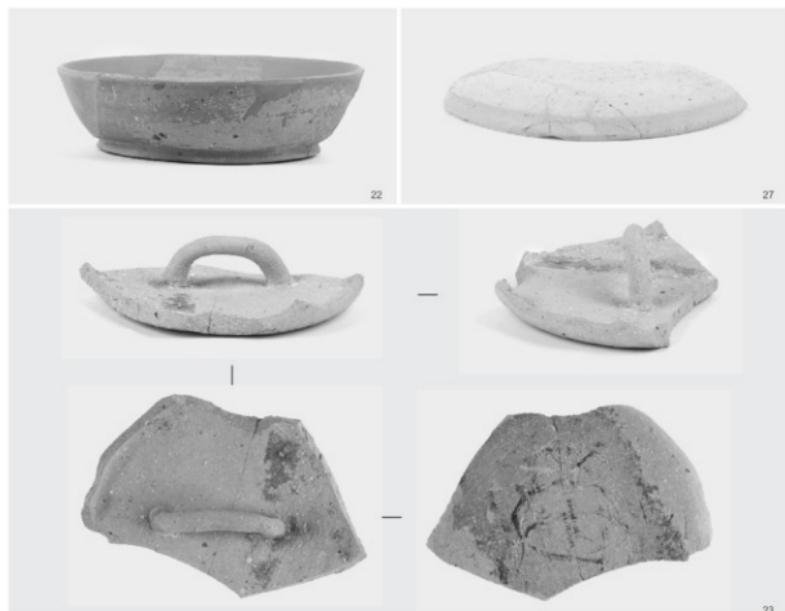
東区人力掘削状況（北西から）



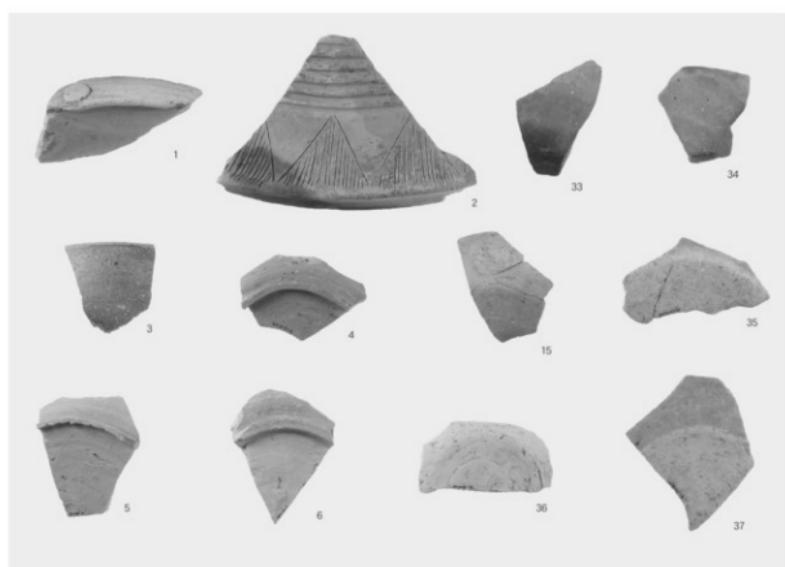
西区遺構検出状況（西から）



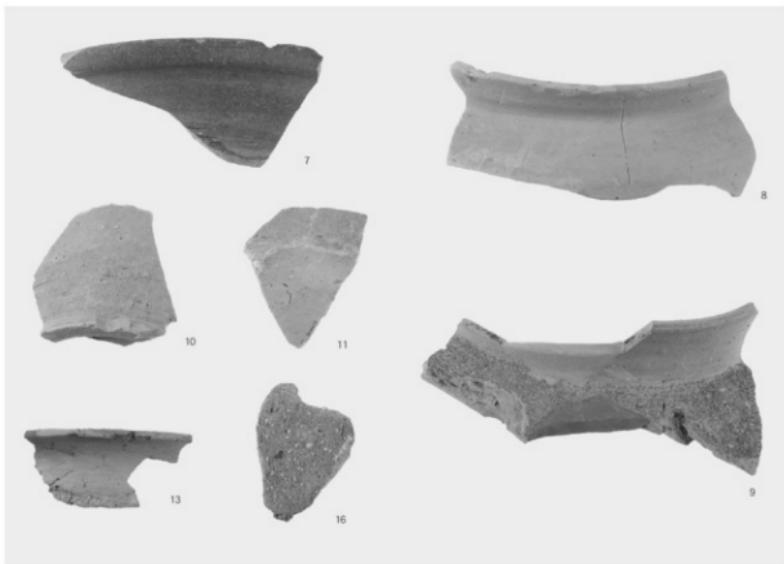
中区土層図作成状況（南西から）



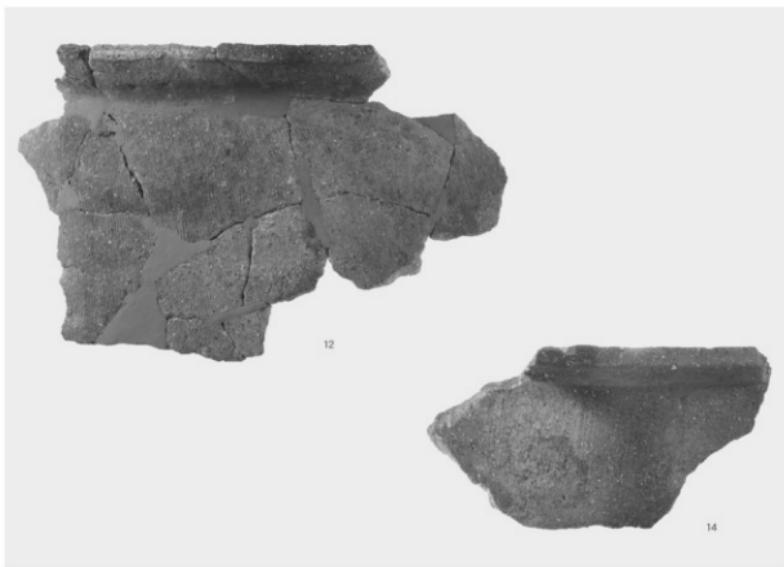
中区・東区出土土器



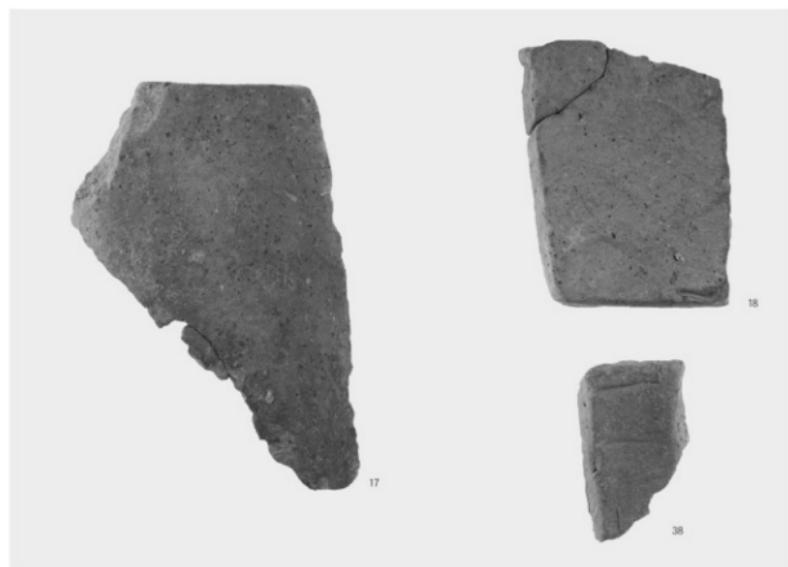
西区出土土器(1)



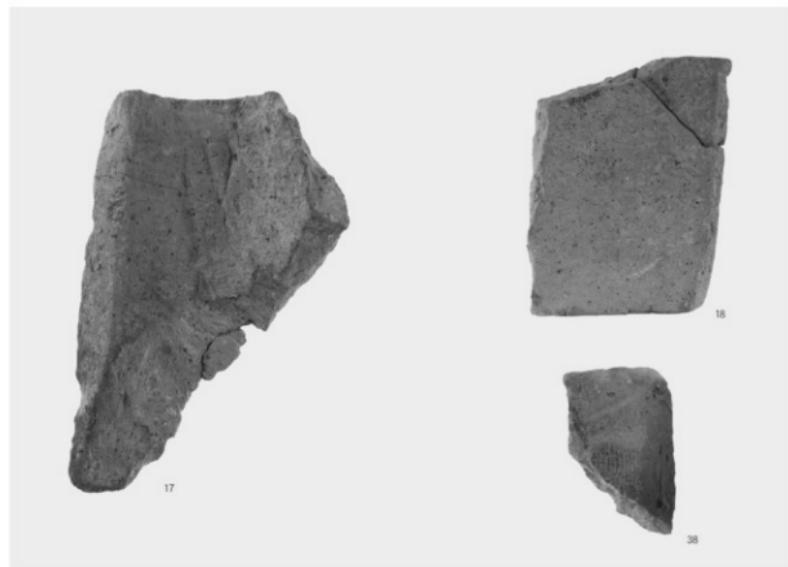
西区出土土器(2)



西区出土土器(3)



西区出土瓦(凸面)



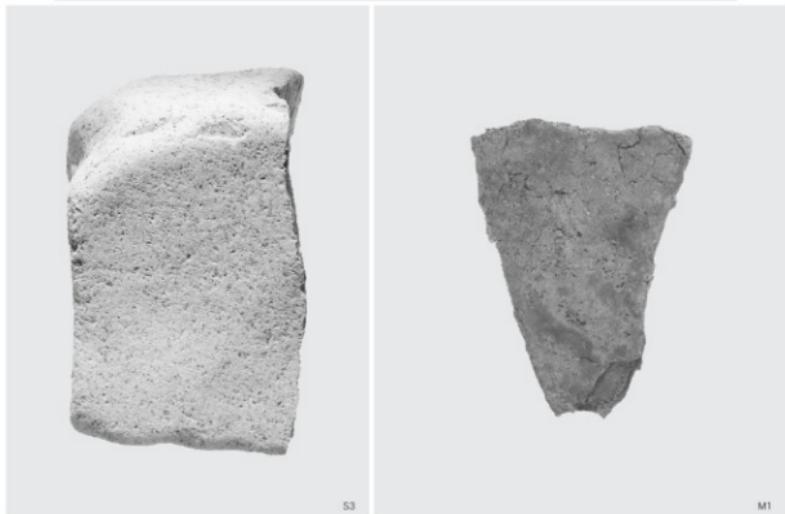
西区出土瓦(凹面)



S1



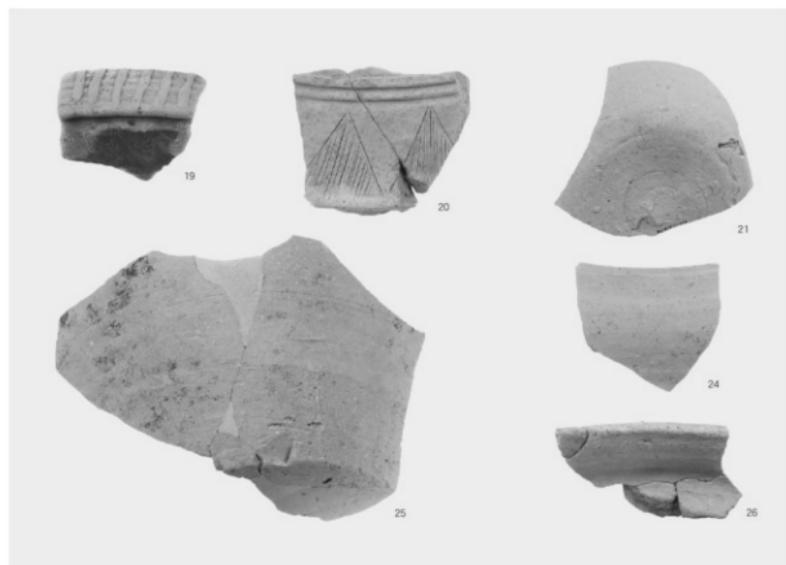
S2



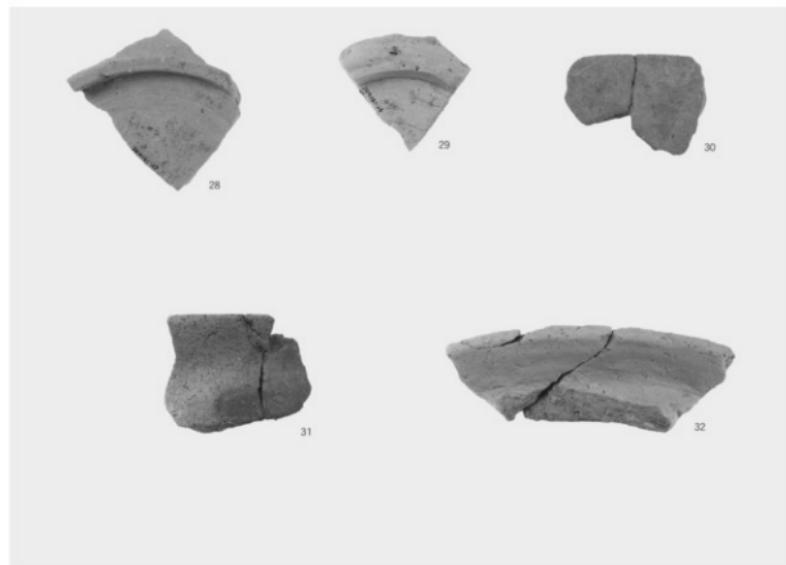
S3

M1

西区出土石製品・鉄器



中区出土土器



東区出土土器

兵庫県文化財調査報告 第412冊

堂本上長塚遺跡

都市計画道路本龍野富永線街路事業
に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2012年（平成24年）3月29日 発行

編 集 兵庫県立考古博物館
〒675-0142 兵庫県加古郡播磨町大中1丁目1番1号
TEL 079-437-5589

発 行 兵庫県教育委員会
〒650-8567 兵庫県神戸市中央区下山手通5丁目10番1号

印 刷 株式会社ソーエイ
〒673-0898 明石市樽屋町6-6
